

「北條五代記」における人物・地名関連分析

An Analysis based on the Persons and Places appeared in “Hojo Godai Ki”

諸橋正幸*

Masayuki MOROHASHI

Abstract : Text mining technology has been established in these few years, and becomes one of the significant tools for applying big data to various fields. However, the technology is not applied yet to the Japanese codices (old text materials) in historical study. This paper describes how to establish the technology in historical studies and shows the result of the text mining using “Hojo Godai Ki” (A chronicle of five successive Hojo rulers), written by Joshin Miura who once was a warrior of the last ruler, Ujinao.

The paper shows the result of word collocation network of person-person pairs, and person-place pairs.

Keywords : Text Mining, Keyword Extraction from Japanese Codex, Word Collocation Network, Hojo Godai Ki, Warring States Period

1. はじめに

戦国時代をどこからどこまでとするかについては諸説あるが、黒田（2011）に従えば、享徳の乱（享徳 4-1455 年）に始まり小田原合戦（天正 18-1590 年）と奥羽の反乱鎮圧（天正 19-1591 年）にいたる 150 年弱がこの時期にあたる。京都室町幕府の弱体化に先立ち、鎌倉公方と関東管領の間に起った一連の紛争の先駆けとなった享徳の乱より以降、鎌倉公方（後の古河公方）・関東管領間の覇権争いに決着がつかないまま、さらには、管領上杉氏の内紛にまで進行したことで、関東は近隣の戦国大名を巻き込む戦乱を繰り返すことになる。この中で、後北條氏は、関東管領内の対立の隙を突き、伊豆に足場を固める（明応 2-1493 年）。その後、小田原を拠点に武蔵・相模一帯を支配し、秀吉の天下統一における最後の有力な抵抗勢力として君臨した関東戦国時代の代表的存在となった。三浦浄心の随筆の中から後北條家に関する話を拾い出し編纂した「北條五代記」は、史料的价值はともかく、その随筆的性格から、また、著者浄心が小田原籠城も体験した家臣の一人ということからも、当時の後北條家から見た領国内外に対する世界観や、近隣の戦国大名に対する感情といったものを表現している材料として、当時の事情

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

を知る手がかりになる。本稿では、この「北條五代記」に記述されている後北條家を中心とした出来事から人物と場所に関する情報を抽出し、テキストマイニング手法により定量的に分析することで、著者が重視した人物・場所に関する潜在的意識（繰り返し言及することで暗示的に重要性を現す表現行動）をあぶり出す。

2. 資料に関する基本統計情報

分析対象とする資料には、橋本（1940）校訂の「北條五代記」を用いる。北條五代記の構成は、全10巻・57話から成る（附録「北條五代記目録」を参照のこと）。テキストのデジタル化にあたっては、橋本の記述通りの表記を用いたが、コードとして存在しない異体字は正字を用い（井→弁）、くの字点（く）は仮名の繰り返しに直した（それく→それぞれ）。その結果、テキストの延べ出現文字数は148,658字であった。

3. 古文書におけるキーワード抽出

ネットの書き込みなどを素材とするテキストマイニングは、日本語形態素解析器「ChaSen」（松本、2007）とそれをベースとする解析ツール¹の普及、および、R言語などによる多変量解析の手軽な実施により、ほぼ確立された技術となっている。しかしながら、ここで用いる形態素解析器は、現代語表記（仮名遣い規則、辞書の漢字表記など）に対応した道具であり、本稿で行おうとしている歴史的資料の分析には適用できない。

そこで、本研究ではテキスト分析の大本に立ち返り、文字列情報を基にした言語に依存しない手法であるKWIC（KeyWord In Context）およびn-gram文字列を利用した分析を行った。図1にその手順を示す。

この手順の中で、辞書の作成はデータの精度（抽出された単語の妥当性精度）を上げる上で重要な位置づけにある。単語抽出に欠かせない形態素解析器も、優れた汎用デジタル辞書の存在があって初めて実現した技術である。以下の手順の詳細でも指摘しているが、古文書では汎用デジタル辞書の実現が難しいこともあり、分析対象の文献ごとに辞書を作成する必要がある。図1にあげた手順は、この特定文献に特化した辞書作成作業を効率よく行うための提案としても意義があると思われる（特に「3.1 疑似単語の出現頻度の調査」から「3.3 辞書の作成と単語の拾い出し」まで）。

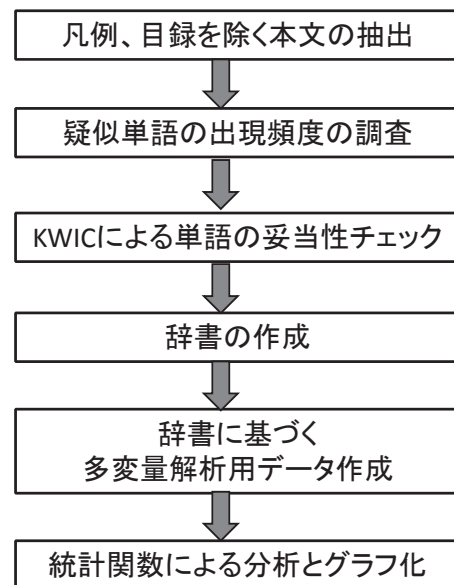


図1 古文書のテキスト分析手順

¹ KH Coder, MeCabなどがよく利用される。KH Coderの利用法については石川（2011）、MeCabの利用法については石田（2012）などに紹介されている。

3. 1 疑似単語の出現頻度の調査

テキストの文字連鎖 (n-gram) から高頻度出現単語を類推することは、形態素情報を用いずに、高頻度単語を探し出すのに有効な方法である。「 $n \approx \text{平均単語長} + a$ 」(a は、1 ないし 0) とするのがよいが²、日本語の場合には、単語自体の定義が明確ではないため使えない。本論文では、分析対象として抽出する語を人名と地名に限るという前提で、漢字の 2-gram を疑似単語リストとして作成し、出現頻度の高い順に並べ、これを用いて高頻度単語を探した (表 1 参照: 表には頻度 75 以上を掲載したが、実際には頻度 11 以上について調べた)。

表中の*印がついた疑似単語のうち、「北條」「上杉」などは個人を特定する語ではないので、そのままでは分析には使えない。「衛門」は「左衛門尉」などの肩書の一部を示す語の断片でありこれもそのままでは人名として使えない。地名においても、「関東」は「北條五代記」が言及する地域全体を指すため、対象から外すことにした。また、「小田」「田原」はそれぞれ、人名・地名とも考えられる疑似単語であるが、それぞれの出現頻度がほぼ同じことから、「小田原」が 2-gram に分割されたものと推測される (この推測は、次節の KWIC によって確かめられる)。

このように、「誰」と「どこ」を示す適切な語を選ぶためのヒントをつかむ上で表 1 は有効だが、これだけでは分析対象の語を選ぶのに十分とはいえない。

また、ここでは仮名書きの語 (「かまくら」など) は検討対象にはならないが、次節に挙げた KWIC を使いながら、漢字書き語 (「鎌倉」など) のバリエーションとして、仮名書き単語を探せばよい。

3. 2 KWIC による単語の妥当性チェック

江戸以前の文献は、正字法が確立していなかったこともあり、同一の単語の表記が多岐にわたる傾向が強い。

北條五代記でいえば、

- ・ 漢字表記と仮名表記の混在

「鎌倉」35 回に対し「かまくら」が 19 回も出現している。

「初音ヶ原三島」の表記はすべて「はつねか原三島」となっている。

- ・ 異体字の混在

今回の分析対象としては採用されていないが、一般名詞で「鉄砲」に関しては「鉄炮」と「鐵炮」の 2 種類があった (現代表記「鉄砲」は使われていない)。

表 1 北條五代記の高頻度疑似単語 (* 印が人名・地名になりそうな語)

	2-gram	頻度
*	北條	212
*	氏康	202
	合戦	202
*	上杉	161
	大將	132
*	氏直	130
*	關東	130
*	衛門	116
	扱又	111
*	伊豆	104
*	小田	103
*	田原	102
*	早雲	99
*	信玄	90
	左衛	89
*	氏政	86
	月十	82
	條氏	80
*	氏綱	78
	一人	78
	其上	78
	味方	77
	門尉	75

² 長尾 (1999) には、英単語の平均語長は 4.5 という調査結果があることが紹介されている。

また、人物に関する表記にも、伝統的呼称には独特のものがああり、注意が必要になる。北條五代記における記述を例にとれば、

- ・ 姓だけで呼ぶ場合はあまりない（一族全体を呼ぶ場合は除く）

ほとんどは「氏直」ないし「北條氏直」など、名のみ、あるいは、姓名をつなげて呼ぶ。早雲についても、北條を名乗る前の「伊勢新九郎氏茂」、または正式な「姓」を用いた呼称「平氏茂」などの呼称もある。
- ・ 一部仮名書きが混在する

「里見義ひろ」「上杉景とら」など
- ・ 尊称で呼ぶ

とくに「公方」はよく出現する（出現頻度 70）³。多くは、職位そのもの（「古河の公方と申候」など）を指すが、特定人物を指す場合もある（文脈から読み取らねばならない）。

…上杉は越後へ落行、景虎を頼み、公方は氏康妹婿、其上…（巻 6-1）

（この「公方」は足利晴氏のこと。ちなみに、「上杉」は上杉憲政）
- ・ 改名が頻繁に起こる、または、別名が存在する

上杉謙信などはその最たるもので、長尾景虎、上杉景虎、上杉輝虎、謙信、などの表記が見える。
- ・ 同名が存在する

「景虎」が謙信と上杉三郎景虎⁴の両者の呼称に使われている。ただし、上杉三郎景虎が登場するのは巻 7-3 のみで、ここでは、謙信は輝虎、三郎景虎は景虎と使い分けている。こうした特徴を考慮すると、単純に疑似単語リストから人名・地名を抽出することは危険である。この欠点を補うため、KWIC (Key Word In Context) を利用する。KWIC は文脈でキーワードの使い方を見るという目的で名付けられた用語であるが、実際には、キーワードではなく、文字（1 文字）を使うことで、言語に依存しない汎用 KWIC 作成ができるところにその特徴がある。ただし、結果が膨大な量となるため（10,000 文字からなるテキストに対し、10,000 行のリストができる）、本稿の分析では漢字と仮名のみについて KWIC 作成を行った（表 2-1 および 2-2 参照）。

³ 「大将」も類出語ではあるが、そのほとんどは一般名詞である。

⁴ 北條氏康の末子で、越相同盟に伴い謙信の養子となった人物である。巻 7-3 は、越後御館の乱における彼の敗死を扱っている。

表 2-1 KWIC の例（「公」の前後文脈）

巻 04-2	へ給ふ事、古記に見えたり、扱又右大將頼朝	公	別して鹿島を信仰候ひし其比、木曾よしなか
巻 01-2	勝ことごとくほろほし、それより以來、關東	公	方たえはて、上杉の家も滅亡す。天文亂とい
巻 01-2	尊氏公より十代持氏公より五代、是を古河の	公	方と申候。又問ていはく、上杉殿の系圖はい
巻 02-3	し、鎌倉の公方よりつたはり關東の公方京の	公	方と號し、兩公方まします、扱又文明の比ほ
巻 03-6	、或老士語ていはく、長享の頃ほひ、關東の	公	方と號し左馬頭源政氏公、鎌倉におはします
巻 01-2	て、古河へ御馬を入給ふ、其後政氏公關東の	公	方と號す、越州上杉民部大輔顯定、かつは治
巻 01-2	ふ。其節氏綱、高基公の一男晴氏公を取立、	公	方にあふき、むこ君になし、總州古河に仕付
巻 01-2	得たる無雙の者なり、此人永壽王殿を取立、	公	方にあふき奉り、天氣をうかゝひ、四位少將
巻 06-1	すかうちはたしかたく、逆意をなため、後も	公	方にあふき奉る所に、動すれはいにしへの郎
巻 03-1	をほろほし其上は古河様を追討仕り、をのれ	公	方にもならん望み、たなこゝろににきるかと
巻 06-1	、それ北條家の根源を尋るに、早雲は京都の	公	方に仕へ、御他界以後たゝ一人駿河へ下り、
巻 02-5	是により善惡を撰ひ、萬民安からず、此よし	公	方に聞召、ひた一錢を用ゆへし、永樂禁制と
巻 03-5	諸侍相談し、持氏公の四男成氏公を引出し、	公	方の御遺跡を取立、主君にあふき、官領上杉
巻 01-1	。是をなけきおほしめす所に、御むさうに、	公	方の御先祖平家をことごとくほろほし給ふ、
巻 06-1	いにしへより數十代相つたはり、かまくらの	公	方の御被官、官領上杉の郎從等也、然に古河
巻 06-2	やもめ女出あひの沙汰は、右大將家以後代々	公	方の法式にも記さす、昔もろこしに展季と云
巻 06-1	下に屬し、上杉は越後へ落行、景虎を頼み、	公	方は氏康妹智、其上若君御誕生、骨肉同姓の
巻 03-4	遠近にふるひ、をそれぬ敵なし、然に古河の	公	方は氏綱の智一味なり、晴氏公小弓の御所を
巻 04-3	とことく降人と成て、氏康旗下に候す、其後	公	方は配所へうつり、流罪せられ、上杉は越後
巻 03-5	とよめりなど云て、或時はほんぎやくを企、	公	方へ弓を引、或時は官領上杉と戦ひ止事なし
巻 01-1	節、するかの國主今川五郎氏親京都に上り、	公	方へ御禮申、下國に至て、いせの守殿の息女
巻 02-3	よりつたはり關東の公方京の公方と號し、兩	公	方まします、扱又文明の比ほひ、兩上杉は關
巻 03-1	をひらき、三千餘騎いさみすゝみ切て出る、	公	方も憲政も兼て催す合戦、たかひに関音をあ
巻 02-3	聞しはむかし、鎌倉の	公	方よりつたはり關東の公方京の公方と號し、
巻 03-6	武州河越の居城を氏綱せめ落す、其頃關東の	公	方をは晴氏公と申、是は高基公讚光院殿の御
巻 03-7	永年中、禪秀亂といひ傳ふる事、其頃鎌倉の	公	方をは兵衛督持氏公と申、然に關東官領上杉
巻 06-1	館にをいて、氏康と合戦し、氏康討かつて、	公	方をも上杉をも追討す、猛威を遠近にふるひ
巻 06-5	すといへ共、我まゝを振舞無禮をあらはし、	公	方を輕しめ申さるゝによつて、關東北條氏政
巻 02-7	り、それ御成敗式目は天下の龜鑑との御時代	公	方家には是を専用ひ給ふ、件式目五十一ヶ條の
巻 03-5	へからず、保元の合戦より以來永禄八乙丑年	公	方義輝公御滅亡まで四百十一年の間弓矢其數
巻 03-7	領上杉安房守憲實、叛逆をくはたて、京都の	公	方義教公へ申により、京勢馳下り、鎌倉にを
巻 06-5	上總介信長京都へせめ上り、三好を追罰し、	公	方義昭公を都へ移し申、天下に義兵を上、關

表 2-2 KWIC の例（「か」の前後文脈）

巻 05-3	を捨る心よりおこる、あしたにはくれなみの	か	ほはせ有といへ共、ゆふへには白骨となる、
巻 05-3	えたり、其上當年は甲子なり、甲子は殷の紂	か	ほろほされ、武王は勝る年也、義弘は紂に同
巻 01-1	とす。高時、時行、ほつらく以後、源尊氏公	か	まくらにおはしまして、御いくわういみしか
巻 02-3	たる無雙の者也、然ともりのたゝ運命つき、	か	まくらにて滅亡し給ひぬ、是によつて、東國
巻 03-7	三年甲戌十二月廿七日、公方西御門成氏公、	か	まくらにをいて、上杉右京亮憲忠を誅したま
巻 03-7	一 永正年中、三浦介道寸と北條早雲	か	まくらにをいて合戦す、道寸討まけ敗北し、
巻 01-1	さかへ給ふと云々。中古にも去ためしあり。	か	まくらのさかいか谷は、北條時政のやしき、
巻 02-3	名皓峰可淳と申き、その後、三浦介道寸は、	か	まくらの近所すみよしに在城す、上杉ともお
巻 06-1	、關東侍はいにしへより數十代相つたはり、	か	まくらの公方の御被官、官領上杉の郎從等也
巻 06-1	仁とす、寛喜の比ほひ、北條武藏守泰時は、	か	まくらの實鸚、文武の達人、天下靜謐に治り
巻 08-2	、扱又運命のかれかたき事思ひあはせり、昔	か	まくらの將軍頼家公は御舎弟實朝の爲に滅亡
巻 04-2	におもむき給ふと其御つけ有と、鹿島の禰宜	か	まくらへ使者を立る、同廿日の戌の刻、鹿島
巻 02-3	京都の將軍よしもち公に御息なきによつて、	か	まくらもちうち君を養子にかねて御定あり、
巻 02-7	也、其科をそれさるへけんや、むかし頼朝公	か	まくらより御上洛諸侍其支度あり、當年田島
巻 02-2	秀衡か子共退治として、文治五年七月十九日	か	まくらを打立給ふ、先陣ははたけ山の次郎重
巻 04-1	奥州泰衡退治として、文治五年七月十九日、	か	まくらを打立發向し給ふ所に、國衡大將軍と
巻 09-1	道寸は至剛智謀兼備せし大將たりといへ共、	か	まくら合戦に人數ことごとく討れ、小勢なれ
巻 02-3	り、近國遠國入みたれたゝかひあり、其後、	か	まくら山内上杉憲忠十州にをよんで収領す、
巻 10-1	向ふ、此渡り十八里、内海の浦つゝき小田原	か	まくら有、此三つの島崎大海原にて出向て、
巻 02-7	に君道あるときんはまもり海外に有と云々、	か	まくら將軍の時代、政道たゝしくをはしませ
巻 05-2	あけてき給ふ、其程に後のゑもんつきと、は	か	まこしの間五寸六寸程有し也、廿四五年以前
巻 05-2	までのけて、膏盲の灸の見ゆる程に着し、は	か	まの前をむなたかにうしろこしをあけてき給
巻 05-1	き臥、二千餘人討取たり、上州衆は瀧川にも	か	まはす、をのれをのれか居城へ引て入、瀧川
巻 08-2	頼朝公奥州出馬に至て、あづかし山に城壁を	か	まふといへ共、廿日の内に滅亡す、信長公天
巻 05-8	經ひとりけなけを專とせり、平家一谷に城を	か	まふる所に、鶴こえといふ人力のをよばぬ高
巻 02-7	盜賊にひとしきと、先哲も申されし、私欲を	か	まふる國主はめつはうその中にあり、秀吉天

表 2-3 逆引き KWIC ⁽⁵⁾ の例（「原」の前部文脈で並べ替えたもの）

巻 05-6	廿二日申の刻に到て、家康公と遠州みかたか	原	の合戦に信玄勝利をえられたり、此節大藤式
巻 09-3	氏直も關八州の軍兵を率し、伊豆のはつねか	原	三島に陣をはる、氏直亂波二百人扶持し給ふ
巻 05-7	陣す、北條氏直も出馬し、伊豆の國はつねか	原	三島にはたを立、對陣を張て、さかひをへた
巻 10-3	さるへき、數日をうつさず、伊豆國はつねか	原	三島へことごとく諸軍を打出し、一戦をとけ
巻 03-7	、駿河の海にて舟いくさを、勝頼うきしまか	原	下へ出見物の事。
巻 05-7	、武田勝頼伊豆の國に向て進發し、うき島か	原	三枚橋に陣す、北條氏直も出馬し、伊豆の國

KWIC を利用することで、「はつねか原」のような、一般には「初音ヶ原」と記述する地名が、北條五代記ではすべて仮名表記になっていることが確認できる（このケースでは「原」をキーとして表 2-3 の逆引き KWIC⁵を調べる）。さらに、前後の文脈を考慮した人物の特定が素早くできるようになる⁶。

3. 3 辞書の作成と単語の拾い出し

ここまでの手順で選定した高頻度単語を原文から抽出する（実際には、表 4 で示すように、高頻度の単語に対して文書ごとの出現回数を調べる）ために、辞書を作成する。辞書には

- ・ 単語のカテゴリー（人名か地名か）
- ・ 単語（統一表記による人名または地名）
- ・ 原文中の表記（「里見義ひろ」「松田おはりの守」など）

が記述される。

なお、原文中の表記の部分には、形態素解析の情報なしに正しい語を抽出できるよう、前後の文脈をつけることができるようにしている。表 3 は、実際に作成した辞書の一部で、後北條家家宰の一人である松田憲秀の項目であるが、その原文中の表記にあるように、「憲秀」という表記で特定できる記述は原文中にはなく、「松田尾張守」「松田」などの表記で「松田憲秀」を指している。ただし、「松田」姓の人物としては「松田左京亮康吉」も登場するため、「松田か旗」「松田持口より敵をことごとく」（1590 年の小田原合戦の際の奮闘の様子を示した記述）などの文脈をつけて、確実に抽出できるようにしている。こうした文脈を確定するために、前述の KWIC を用いる。

表 3 文脈付き辞書の例

カテゴリー	単語	原文中の表記
person	松田憲秀	松田、
person	松田憲秀	松田おはり
person	松田憲秀	松田か
person	松田憲秀	松田持口
person	松田憲秀	松田尾張守

3. 4 分析用データ作成

「北條五代記」は前述のとおり、10 巻 57 話からなる。1 話に 1 つないし 2 つ以上の逸話が掲載され（主に 2 つ。この場合には最初の逸話に関連する中国の故事、あるいは、鎌倉時代の逸話などの挿話がついているケースが多い）ている。人物間の関連や人物と地名の関連を分析するには、「話」を文書単位として採用するのが適切であると判断した。ただし、第 3 巻 7 話は

⁵ キー文字の前半部文脈を右から左へソートした KWIC のことである。

⁶ たとえば、「公」に該当する行の文脈を調べることで「昨日公氏に給る」（宮内兵衛尉公氏のこと）と「秀吉公氏直を大坂へ」（秀吉公と氏直）を峻別する。

後北條家が絡む主な戦役を羅列したものであるため、分析対象から外した⁷。

作成したデータは表4のような形式で保存される。ここから、表5にあるような、人名（または地名）と出現文書の関係を示すデータを作ることは容易である。

表4 分析用データ

単語	カテゴリー	出現回数	出現文書 id
北條早雲	person	16	巻 01-1
伊豆	place	9	巻 01-1
京都	place	4	巻 01-1
平氏	person	4	巻 01-1
今川氏親	person	4	巻 01-1
…			
足利持氏	person	7	巻 01-2
足利晴氏	person	5	巻 01-2
…			

表5 人物と出現場所（文書 id）の関係（トップ15のみ掲載）

—各人物に対し、1回以上出現した文書に該当するセルは「1」—

person	出現文書数	巻01-1	巻01-2	巻01-3	巻01-4	巻01-5	巻02-1	巻02-2	…	巻10-5	巻10-6
北條氏直	31	1	0	0	1	1	0	0		1	1
北條氏康	28	0	1	0	1	1	1	1		0	0
北條氏政	19	0	0	0	1	0	0	0		0	1
源頼朝	19	0	1	1	0	1	0	1		0	0
北條氏綱	17	0	1	1	0	0	1	0		0	0
豊臣秀吉	16	0	0	0	0	0	0	0		1	1
武田勝頼	13	0	0	0	0	0	0	0		1	0
北條早雲	12	1	1	0	0	0	0	0		0	0
平氏	11	1	0	0	0	0	0	0		0	0
武田信玄	11	0	0	0	0	0	0	0		0	0
織田信長	10	0	0	0	0	0	0	0		1	0
上杉謙信	9	0	0	0	0	0	0	0		0	0
上杉憲政	9	0	1	0	0	0	0	0		0	0
徳川家康	9	0	0	0	0	0	0	0		0	1
里見義弘	9	0	0	0	0	1	0	1		0	0

⁷ 第3巻7話は、「応永（1416年の上杉禅秀の乱）より慶長（1615年大坂冬の陣）関東合戦の次第の事」と題されているとおり、200年間の主な戦役を箇条書きで挙げたものであり、特定の逸話ではない。

4. 人名・地名の関連分析結果とその考察

表5の分析用データを基に、人名同士の共起（同一文書における出現共起）と人名・地名の共起を調べた。テキスト分析において、通常、共起（collocation）は、同一文における係り受けなどの構文関係を見るために用いることが多い。しかし、ここでは、一つの話（文書id、「巻xx-x」でくくられる範囲）の中で同時に採り上げられる人名-人名、人名-地名という関係を調べるため、同一文書内での共起関係を見る。「北條五代記」においては、戦闘の話が多いため、典型的な「人物-人物」組には、敵対・協同などが反映され、「人名-地名」組の共起では、戦闘の場所とそこで活躍する人物が浮かびあがってくるのが期待される。

共起の回数は、異なる文書に何回出現したかを数えたものである。表6に共起回数の多い人名の組をあげたが、この中で、例えば、氏直と氏康の共起（13回）は、表5に戻って確認すれば「巻01-4 小田原北條家旗馬しるしの事」「巻01-5 犬也入道弓馬に達者の事」などで起きていることが確認できる。共起回数が多いということは、様々な話題でそのペアが取り上げられていることを示している。

4. 1 人名同士の共起ネットワーク

表6は、人名同士の共起回数を多い物から順に示したものである。この表からだけでも、後北條家代々の当主の間関係や近隣戦国大名との関係が多く採り上げられていることが読み取れるが、図2-1（表6のうち共起回数が8以上の組についてネットワーク図にしたもの）、図2-2（表6のすべての組、すなわち、共起回数6以上でネットワークを図示したもの）に挙げたような人物関係ネットワークにすると、彼ら間関係が別の面から見えてくる。

表6 人名同士の共起（共起回数6以上）

person1	person2	collocation	person1	person2	collocation
北條氏康	源頼朝	15	北條氏直	武田信玄	7
北條氏直	北條氏康	13	上杉謙信	織田信長	7
北條氏綱	北條氏康	13	上杉謙信	北條氏政	7
北條氏康	北條氏政	13	豊臣秀吉	武田信玄	7
武田勝頼	北條氏直	11	豊臣秀吉	源頼朝	7
北條氏直	豊臣秀吉	11	織田信長	北條氏康	7
北條氏直	北條氏政	11	北條氏綱	北條氏政	7
北條氏直	源頼朝	10	武田勝頼	上杉謙信	6
武田勝頼	織田信長	9	武田勝頼	北條氏康	6
武田勝頼	武田信玄	9	北條氏直	徳川家康	6
北條氏康	上杉憲政	9	北條氏直	北條早雲	6
上杉謙信	北條氏康	8	北條氏直	松田憲秀	6
上杉謙信	武田信玄	8	上杉謙信	豊臣秀吉	6
豊臣秀吉	織田信長	8	豊臣秀吉	北條氏政	6
豊臣秀吉	北條氏康	8	織田信長	北條氏政	6
織田信長	武田信玄	8	北條氏綱	足利晴氏	6
北條氏綱	源頼朝	8	北條氏綱	上杉憲政	6
北條氏綱	上杉朝定	8	北條氏綱	北條早雲	6
北條氏康	北條早雲	8	源氏	北條氏康	6
北條氏康	武田信玄	8	足利晴氏	北條氏康	6
北條氏康	里見義弘	8	足利晴氏	上杉憲政	6
武田信玄	北條氏政	8	上杉憲政	北條氏政	6
武田勝頼	豊臣秀吉	7	上杉憲政	源頼朝	6
武田勝頼	北條氏政	7	北條早雲	北條氏政	6
北條氏直	織田信長	7	武田信玄	源頼朝	6
北條氏直	北條氏綱	7	北條氏政	源頼朝	6
			源頼朝	里見義弘	6

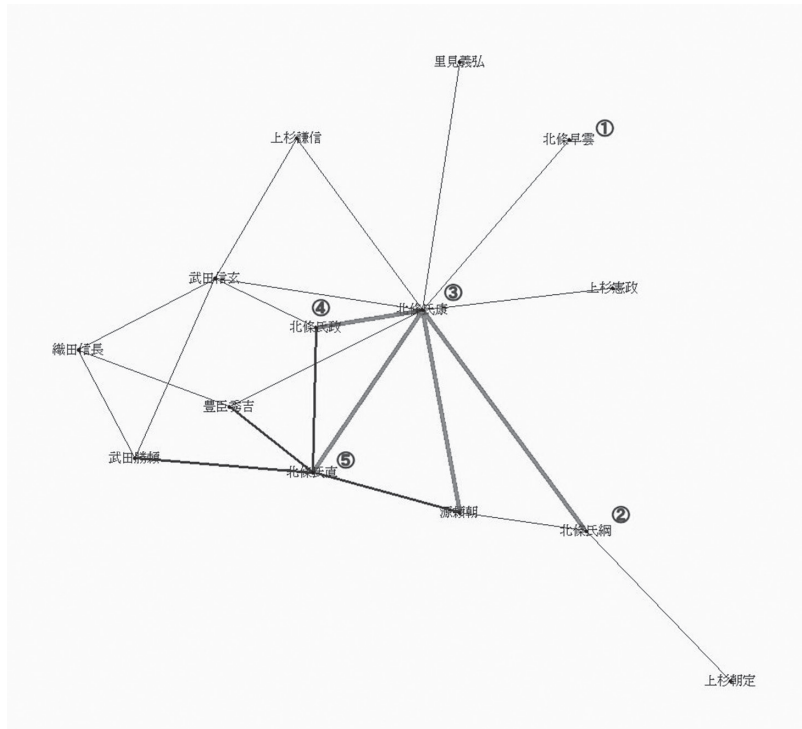


図 2-1 人名同士の共起ネットワーク（共起回数 8 以上）
（太線は共起回数上位のもの。数字は後北條家当主）

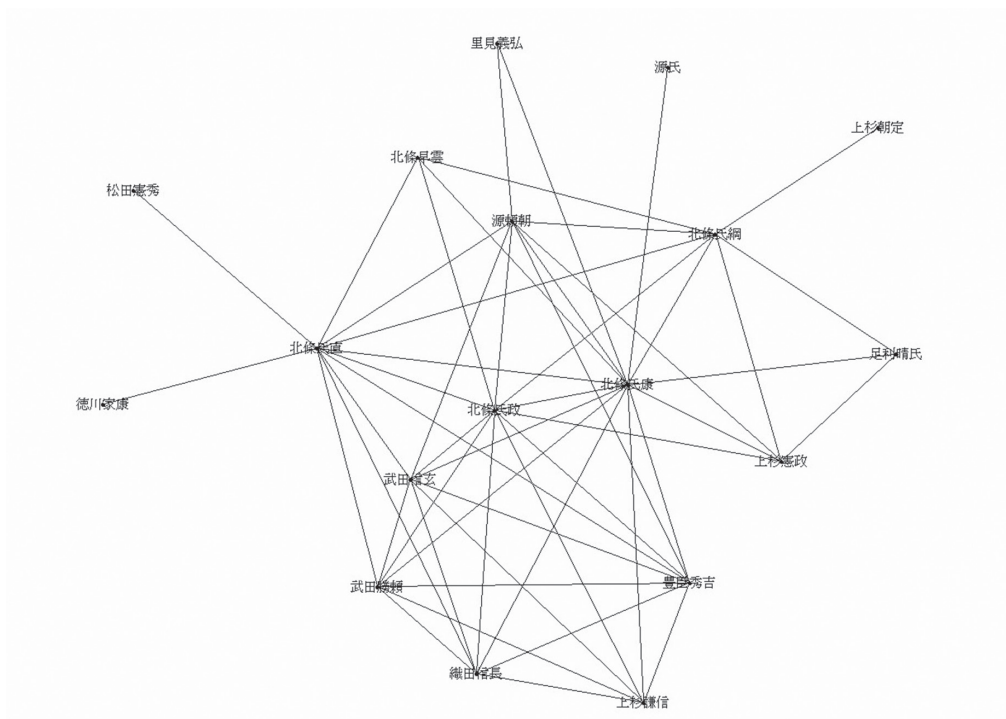


図 2-2 人名同士の共起ネットワーク（共起回数 6 以上）

まず、後北條家5代の当主（図2-1中の①から⑤）に注目すると、後北條が関東における領土を最大に広げた時代の当主氏康が1つの核となっていることがわかる。ここから血筋である早雲・氏綱・氏政・氏直との繋がり、長く敵対関係にあった山内上杉家の憲政・里見など関東内の有力家、武田信玄・上杉謙信などの関東を囲む戦国大名が関係している。

その中で、源頼朝が非常に多く共起しているのは、後北條の盛衰を史実から表面的に追う視点で考えると少し奇妙に思われる。これは、関八州を舞台として、公方、官領との確執を繰り返してきた後北條家にとって、国衆の信望を集めるための手段として鎌倉幕府の執権北條氏との関連を印象づける「北條改姓」と同様の動機として、幕府設置の祖である源頼朝の事蹟を引用することに重要性を感じた後北條家関係者（少なくとも著者浄心）の認識が働いていたと考えられる⁸。

図2-1で目立つもう1つの核は氏直である。武田家の滅亡（勝頼）とその後の後北條家の中央政権との対立・滅亡に絡む織田信長・豊臣秀吉などの関係（「巻5-1 北條氏直と滝川左近將監合戦の事」「巻10-2~5の小田原合戦に関する話」など）は、まさに後北條家にとって最大の出来事で登場する関係者の関連付けが明確に図示されている。

4. 2 人名－地名の共起ネットワーク

表7および図3-1、3-2は人名－地名の組に対して共起回数を調べ、図示したものである。

人名同士の共起に比べ、上位の組の共起回数が多いことが表7から分かる（第1位の組み合わせ「氏直－小田原」は、分析対象全56話のうち21話で、実に全体の4割弱にあたる）。このデータをネットワークで表したものが図3-1、3-2である。

表7 人名・地名の共起（共起回数10以上）

person	place	collocation	person	place	collocation
北條氏直	小田原	21	北條氏直	駿河	11
北條氏康	小田原	19	北條氏直	上野	11
北條氏直	伊豆	16	北條氏直	下野	11
豊臣秀吉	小田原	15	北條氏康	伊豆	11
北條氏政	小田原	14	北條氏政	武藏	11
北條氏直	京都	13	北條氏政	伊豆	11
北條氏康	鎌倉	13	北條氏直	武藏	10
北條氏康	京都	13	北條氏直	安房	10
源頼朝	鎌倉	13	北條氏直	鎌倉	10
源頼朝	小田原	13	北條氏綱	伊豆	10
北條氏綱	小田原	12	北條氏康	河越	10
北條氏康	武藏	12	北條氏康	越後	10
北條氏康	安房	12	北條氏政	越後	10
北條氏康	上野	12	北條氏政	京都	10
北條氏康	下野	12	源頼朝	安房	10
			源頼朝	京都	10

⁸ もちろん、原文中に頼朝を採り上げる意図が書かれているわけではないので、これは著者の類推ではあるが、黒田（2011）も、後北條家が公方・管領との戦いの中で関東の国衆を味方に引き入れ、盟主となるため、鎌倉政権からの継承性に考慮していたことを、歴史学の立場から強調している（黒田2011のp.18-20「北条氏の誕生」、p.38-41「氏綱による鶴岡八幡宮の修造」など）。

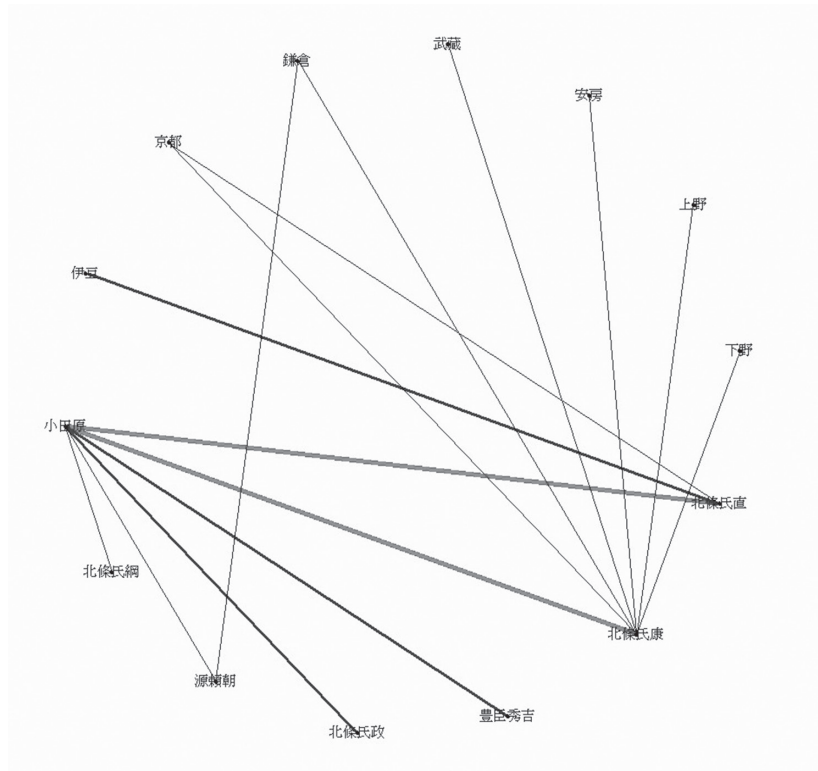


図 3-1 人名・地名の共起ネットワーク (共起回数 12 以上)

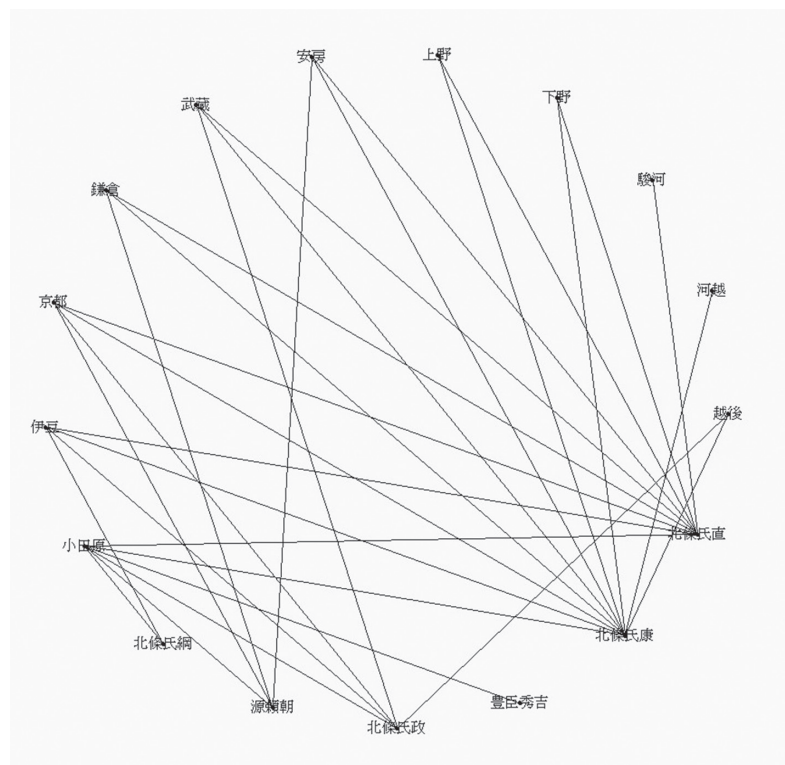


図 3-2 人名・地名の共起ネットワーク (共起回数 10 以上)

図 3-1 には 2 つの核「小田原」と「氏康」が見てとれる。

小田原は氏綱以来後、後北條家の本拠地であるが、「小田原」から出ているリンクの中でも特に太い（共起数が多い）リンクは氏直と氏康である。氏直と小田原の関係の多くは、秀吉に攻められ開城を余儀なくされた小田原合戦に関係する（巻 10-2~6 はすべて小田原合戦の記述である）ことは明白である。一方、氏康と小田原の関係は、謙信・上杉憲政連合軍による小田原侵攻（1560 年）に絡む話題が寄与している。

氏康を核とした地名を見ると、武蔵・安房・上野・下野といった領土拡大戦争の最前線が見えてくる。

図 3-2 では、3-1 に登場しなかった早雲が出てくるが、今川氏親の支援を得て侵攻し、国造りの拠点とした伊豆との関連のみしか見えてこない。人名同士のネットワークでも初代当主北條早雲は、意外に広がりが見えない⁹。

鎌倉-氏康、鎌倉-氏直の共起は、人名同士で見られた「頼朝-氏康」「頼朝-氏直」の関係が鎌倉を介してつながっていることを示している。

5. おわりに

ビッグデータ活用のための手段として、様々なメディア解析手法の開発・適用が活発に行われているが、その中でもテキストマイニングは、形態素解析精度が上がったことで比較的早い段階から種々の分野で活用されている。

しかしながら、形態素解析の精度は、利用する辞書が対象テキストをどの程度カバーしているかで左右される。その意味で、対象分野に最適な辞書の整備をいかに効率よく行うかを試すことが重要である。本論文は「北條五代記」専用の辞書作りがどこまで分析精度を上げたかを示す試みでもあり、一応の成果をあげたと思っている。

また、歴史学における文献研究は、従来、対象とする文献の記述の正確性や他文献とのつき合わせによる記述の客観性に重点が置かれていたが、歴史の中に生きる証人からの潜在意識のあぶり出しという側面を持つ統計的分析は、新しい歴史研究の試みとして、価値のある仕事であると思う。実際、謙信の小田原城攻め（永禄 4、1561 年）の前後の関東国衆の従属・離反や、そのきっかけとなった出来事については、黒田（2011）の第 4 章で詳しく述べられているが、後北條氏との心理的距離やそれをはかる尺度として、少なくとも後北條家側が頼朝の政治姿勢を重視してアプローチしていた（しようとしていた）ことは、本論文の結果から説明できる。

⁹ 今川氏の支援のもと、伊豆に侵攻し拠点を築いた話は、冒頭の「巻 1-1 伊豆早雲平氏茂由來之事」で取上げられているが、他の話題に関連して繰り返されるのが少ないことを示している。

参考・引用文献

- 石川慎一郎、他（2011）言語研究のための統計入門. くろしお出版. 東京
- 石田基広（2012）Rによるテキストマイニング入門. 森北出版. 東京
- 黒田基樹（2011）戦国関東の覇権戦争. 洋泉社. 東京
- 長尾真、他（1999）自然言語処理. 岩波講座ソフトウェア科学 15. 岩波書店. 東京
- 松本裕治（2007）ChaSen—形態素解析器. 奈良先端科学技術大学院大学松本研究室. 奈良
<http://chasen-legacy.osdn.jp/>（2015年9月1日閲覧）
- 三浦浄心著、橋本實校訂（1940）北條五代記. 雑誌古典研究第5巻第14号別冊附録. 雄山閣. 東京

付録 北條五代記目録

卷第一

- 一 伊豆早雲平氏茂由來之事
- 二 關東天文亂の事
- 三 上杉朝成を生捕事
- 四 小田原北條家旗馬しるしの事
- 五 犬也入道弓馬に達者の事

卷第二

- 一 北條氏綱と上杉朝定合戦の事
- 二 敵一人を三人して討捕事
- 三 兩上杉たゝかひの事
- 四 福島伊賀守河鱸を捕手柄の事
- 五 關東永樂錢すたる事
- 六 岡山彌五郎木下源藏討死の事
- 七 古今弓箭の沙汰の事

卷第三

- 一 北條氏康と上杉憲政一戦の事
- 二 房州里見家の事
- 三 關八州に鉄炮はしまる事
- 四 源義明公滅亡の事付首實驗の事
- 五 軍法昔にかはる事
- 六 兩上杉と平氏茂戦ひの事
- 七 應永より慶長關東合戦の次第の事
(分析の対象とせず)

卷第四

- 一 北條氏政東西南北と戦ひの事
- 二 關東長柄刀の事付かぎ鍬の事
- 三 北條氏茂百姓憐愍の事
- 四 神田神事能の事付江戸城はしまる事

卷第五

- 一 北條氏直と瀧川左近將監合戦の事
- 二 關東昔侍形義異様なる事
- 三 下總高野臺の合戦の事
- 四 八丈島渡海の事
- 五 江雪入道一興の事付男女別の事
- 六 清水太郎左衛門大力の事
- 七 昔矢軍の事
- 八 前陣軍に討負二陣にて切返す事

卷第六

- 一 上杉輝虎武田信玄小田原へ働事
- 二 嫠男とやもめ女うつたへの事
- 三 百姓氣なけをはたらく事
- 四 北條氏康和歌の事
- 五 欲心身をほろほす事

卷第七

- 一 伊勢新九郎伊豆相模を治る事
- 二 駿河海にて船軍の事
- 三 上杉三郎景虎滅亡の事
- 四 東海にて魚貝取盡す事付人魚の事
- 五 兵法勝負の事

卷第八

- 一 物見の武者ほまれ有事
- 二 北條氏康智仁勇の徳有事付實朝公の事
- 三 關東侍老て今譽をあらはす事
- 四 東國山嶺に狼烟を立る事付大伴黒主か事
- 五 北條家の軍に貝太鼓を用る事
- 六 大龜陸へあかる事

卷第九

- 一 三浦介道寸父子滅亡の事
- 二 關東侍天下に望みをかくる事
- 三 關東の亂波智略の事
- 四 戦船を海賊といひならはす事

卷第十

- 一 三浦三崎寶藏山舊跡の事
- 二 秀吉公關東発向付豆州山中落城事
- 三 小田原籠城の事
- 四 小田原籠城捨曲輪へ攻入事
- 五 笠原新六郎氏直へ逆心の事
- 六 氏直落の事